

## ナミビアへの遺骨返還式典における シャリテ・ベルリン医科大学理事長 アインホイプル教授の挨拶(2011年9月30日)

(来賓への呼びかけ省略)

みなさまがベルリンに来られたことを、このシャリテの伝統あるキャンパスにおいて心より歓迎いたします。私は来賓名簿の全てのお名前を読み上げ申したいところですが、そのリストがたいへん長いため、そうできないことをお許しください。また私が発音を間違えたかもしれないこともご容赦ください。この歴史的な行事が可能となりましたのは、ナミビア大使館のみなさんとの数年間の重要な協働のおかげです。そのことに心より感謝いたします。本日の共同ホストであるドイツ外務省が、ドイツ側から連絡と組織とをリードしてくださいました。特別の感謝を申し上げます。

私たちの本日の式典は、ドイツ史の暗い一章に光を当てるものです。歴史家ヘルムート・プレスナーの用語によれば「後発国」として、ドイツが植民地を保有していた歴史は40年間に過ぎません。この植民地史の短さとは関係なく、特にアフリカとアジアの領土での人々に対する過酷な収奪を含む、植民地に対する破壊的な統治において、ドイツ帝国は他のヨーロッパ列強と競い合い、時には他国を凌駕するほどでした。

ドイツ帝国史の不名誉な面として突出していることのひとつは、1904年から08年にかけてドイツ領南西アフリカのナマとヘレロの人々に対し行われた絶滅戦争です。この戦争はながらく、第一次世界大戦、および第二次世界大戦のドイツ

の残虐行為の陰に隠れてきました。しかし近年の歴史学者の研究によって、以下のことが明らかにされています。「20世紀初めにドイツ領南西アフリカで起こったことの多くが、1940年代の出来事の予兆である。ナチの人種戦争のビジョンと並ぶヘレロ人とナマ人に対するジェノサイド、そして東欧への植民、これらは、より大きな現象の別の現れとみなされる。大きな現象とは、人種植民地主義という恐るべき傾向である」<sup>1</sup>

ここで注目すべきは、政治家、将軍、官僚、大地主だけが、当時の人種植民地主義のアクターではなかったことです。私自身、科学者として、そして医者として、自分が専攻する分野の研究者もまた、この初期の形のレイシズムに仕えたことを、痛みをもって認めなければなりません。シャリテの収集物にある先住民ナマ人とヘレロ人の遺骨は、ベルリン医大ですら白人種の優越性を科学的に示すといういまわしい努力に関わっていた証拠です。

弁護する視点に立てば、そのような科学的レイシズムは同時代の研究者に共通のものだったから仕方ないと言えるかもしれません。私はそれをまったくの言い訳だと思います。すべての研究機関が、すなわちシャリテもまた、保管する遺骨の歴史を綿密かつ包み隠さず分析するという課題を担わなければならない。私はそう確信しております。

解剖学者でありリベラルな政治家ルドルフ・ヴィルヒョウは、近代シャ

リテの創設の父の一人でありますが、1848年にはすでに医学が社会医学であり、政治とはスケールを広げた医学だと述べています。人種、宗教、政治信条に関わりなく、医学は公平な社会と人類のために貢献する責任があると明言しているのです。<sup>2</sup>

私たちの今日の式典に際し、シャリテ理事会はこのルドルフ・ヴィルヒョウの遺産を強調いたします。ナミビアの頭骨の来歴の全てを明らかにするにいたっておりませんが、理事会はナマとヘレロの人々が被った苦難に関する歴史的責任があることを認めます。確実に遺骨の返還を進めることにより、シャリテは犠牲者への敬意を示すと共に、科学の進歩という倒錯した考えのもとに行なわれた犯罪に対し遺憾の意を表します。

私は皆様とそのご先祖に心からの謝罪を申し上げたいと思います。

犠牲者に敬意を示し、そして不正な行ないへの悲しみをもって、私は皆さんに1分間の黙禱を呼びかけます。

<sup>1</sup> David Olusoga et al. (2010): The Kaiser's Holocaust. Germany's Forgotten Genocide and the Colonial Roots of Nazism, London, p. 361.

<sup>2</sup> Rudolf von Virchow (1848): Der Armenarzt, Die medicinische Reform 18, 125

(翻訳 小田博志)